

一般演題【臨床例】

当院におけるスポーツ専用高気圧酸素治療の現状と有害事象

梅木秀一^{1),2)} 山口信彦^{1),3)} 平畑佑輔^{1),2)}

増田裕也^{1),2)} 安井洋一^{1),2)} 笹原 潤^{1),2)}

宮本 亘^{1),2)} 中川 匠^{1),2)} 河野博隆²⁾

1)帝京大学スポーツ医科学クリニック
2)帝京大学スポーツ医科学センター
3)医療法人徳洲会 山内病院

2018年8月、帝京大学スポーツ医科学センター棟内に高気圧酸素治療装置を保有する帝京大学スポーツ医科学クリニックを開院した。当院の装置はバロテックハニユウダ社製で、最大定員8名の第2種装置である。当施設はスポーツ傷害診療に特化しており、各種スポーツ傷害に対して高気圧酸素治療を行っている。

2018年11月から2023年3月末までの総治療回数は3550回で、平均年齢は23歳であった。疾患別にみると、肉ばなれが1021回(29%)と最も治療回数が多く、次いで捻挫・靭帯損傷994回(28%)、骨折・骨挫傷389回(11%)、疲労回復382回(11%)、打撲・筋挫傷346回(10%)の順に治療回数が多かった。また、スポーツ別の治療回数は、ラグビーが2117回(60%)と最も多く、次いでサッカー436回(12%)、陸上435回(12%)の順であった。治療開始後に中止となった症例は12例(0.3%)あり、全て気圧外傷(中耳気圧外傷9例、副鼻腔気圧外傷3例)であった。

本発表では有害事象の発生した症例で特殊なケースもあったため、それについても紹介する。